



わたしの聖戦

女性が働くことについて
医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

189

脳と色

日曜日の朝9時から「ゲゲゲの鬼太郎」が放送されている。

懐かしさのあまり、チャンネルを合わせてみてしばし見入ってしまった。スマホあり、ネットありで完全に今風になっ

ているものの、鬼太郎ほか、目玉のおやじ、猫娘、砂かけ婆、一反木綿などの登場キャラは変わらない。せこい・ズルい・かつこ悪いの3拍子揃ったネズミ男も健在だ。先週は、目玉おやじがかつてイケメン男だったことが判明し、鬼太郎に似た風貌の、かつての目玉おやじが登場していた。

決定的な違いは、小さい頃私が観ていた鬼太郎

は白黒だったものが、現代版はカラーに彩色されている点だ。当然ながら、それが新鮮さを感じるものの、何となく白黒で観たかったという微かな欲望が湧いてくるのを感じた。

今の若い学生などは、生まれた時からカラー画面しか観ていないので、白黒のものには違和感を覚えるらしい。そもそも白黒の映画など、まずは観る気にもならないと聞く。

2011年のベルギー映画「アーティスト」は、全編白黒だった。それどころか、サイレント映画でもあった。サイレントからトーキーに移り変わ



る過渡期を描いた作品だったため、それもしかり時代についていけないサイレント映画のスターの零落（れいらく）と復活を描いた傑作だ。

この映画は、白黒でなければならぬ。その時代のリアルを打ち出しつつ、忘れられていく過去への決別を描き出すためにはカラー作品では成立しなかった。言語も同じことで、ナチス時代のドイツが舞台なのに全員が英語を話していたり、冷戦時代を描いているにもかかわらず、これまたロシア人を演じる俳優が英語のセリフを口にする。少し前のハリウッド映画にはそこらあたりのこだ

わりがまだ見られたが、最近はずいぶん杜撰（ずさん）になっているように思う。

色の多様性は、人類の進化とともに発展してきた。我々（ヒト）がはじめて目にしたのは海と空の色、ブルーだ。それが進歩の過程で言語を得、コミュニケーションを築きあげていく中で、認識できる色が増えていった。そのためブルーに代表される原始的な色はともかく、経験に裏打ちされて獲得した色の見え方は、ヒトによってそれぞれ異なるのだという。

幼い頃は、青、赤、黄、緑程度の種類で事足りたものが、成長するにつれ同じ青でも黄色みを帯びた青や紫に近い青、群青色、すみれ色などと色の数が豊富さを帯びる。そのため、幼稚園児の色鉛筆セットと比べて高校生のそれは、色の種類が格段に増えている。そういう意味では、技術が発展しテレビドラマ

やアニメが鮮やかな色で描かれるのは当然であり、理にかなっている。単純な白と黒では我々の脳は物足りなさを覚えてしまうのだ。

しかし、なぜだろう。そうわかっていても、白黒の鬼太郎のほうが、おどろおどろしい様子や不気味な妖怪たちの暗躍が画面いっぱいに繰り広げられ、やはり私は白黒で観たいと思ってしまう。おそらくそれは「郷愁」に近い感情かもしれない。こうであって欲しいという願いが幼かった私の記憶とともに根強く残っているのだろう。

ところで、オードリー・ヘップバーンの「ローマの休日」もモノクロだ。実は冒頭のパーティーでオードリーが着ていたドレスはピンク色だった。しかし、それを観た後でも、脳裏に焼き付いているのは白黒の画像だ。脳は思ったより頑固なのかもしれない。

イラスト・伊藤栄章